アウトローサマナー

ヴァース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アウトローサマナー

【Ｎコード】

Ｎ３８９８ＢＡ

【作者名】

ヴァース

【あらすじ】

なんとなくをモットーに戦う召喚魔術士が主人公のお話し。の短編。

クソ、あの人たち、僕を置いて逃げましたね！　という叫び声が迷宮に響き渡る。

ここは迷宮都市国家アズマリア。地下深くに広がる迷宮がある都市で、多くの冒険者がその最深部を目指して潜る。というより、迷宮にある金銀財宝を求めて、の方が正しいか。

潜るにはこのメイビス大陸をまたにかけるギルドに登録して身分を証明しなければならないが。

階層はどこまであるか分かってはいないが、百はあるとされている。

そして、深く潜れば潜るほどそこに住む魔物も強くなってくるのだが、ここは六十階ほど。結構なレベルでなければ辿り着くことさえできない。

そこで一人の人間が一直線の通路を走りまわっている。というより逃げている。

「なめてやがりますよね！　普通逃げませんよね！？　人が頑張って戦ってるのにこっそり逃げ出したりする人いませんよね！？」

彼もここに一人で来たわけではない。ちゃんとパーティを組んでやってきた。

しかし、即席だったのがいけなかったのだろう。彼が頑張って戦

っている内に、こっそりとパーティ全員に逃げられてしまった。

白い髪を振り乱しながらとにかく走る。紅い瞳は焦燥と恐怖が入り混じっていた。

そんな彼の後ろをずしんずしんと追いかけ回すのが、

「ゴアアアアアアアアアアアアアア！！」

巨大な戦斧（バトルアックス）を手に持った、上半身牛、下半身馬の、所謂ミノタウロスと言う奴だ。全長は三メートルほどで、人間の脅力のざっと五倍はあるだろうその強靭な腕。その腕でさらに巨大な戦斧を振り回してくる。

それが十頭。これが逃げずしてどうなろうか？

「一秒でミンチにされてしまいますよォォオオ！？」

こんな状況でも丁寧な口調は崩さず、それでいて慌てた様子が手に取るように分かる叫び声を上げる。

自分で想像して血がサーっと引くのが分かった。

彼とて、全く戦えないというわけではない。手には魔力を流せば誰でも使えるような魔導式鞭が握られているし、背には巨大な杖が背負われている。着ている黒のローブは、『天体の外套』というＳＳランクまである装備品のＳランクだし、身につけている装飾品もそこらへんで手に入れられるようなものではない。

それでも彼は逃げるのだ。

「ブモォオオオオオオオオオオオオオオオ！！」
「ゴオアアアアアアアアアアアアアア！！」
「ヒィイイイイイイイイイイイイイイイ！？」
装備から見るに彼が魔導師だということは分かるだろう。それも、それなりに高ランクの。
彼が逃げるのは、戦いたくない、殺したくないという大そうな志ではない。そんなもの持っていたらこの迷宮では生きていられない。
彼は、ギルド公認の変わり種。
「神様ァァァァ！！
才能っていうのは平等に振り分けるべきですゥゥゥゥゥゥゥゥ！！」
彼は息を切らしながらとにかく走る。
こんなところで戦っては戦略もクソもない。
そんなとき、かなり広い場所へと出た。
「ここならッ！！」
少年は振り返る。
そして、若干引け腰になりながらも、背中に背負っていた巨大な杖を手に取った。

『召喚杖セフィロト』。生命樹セフィロトの木を切り出して作ったと言われ、先端の網目のように広がったところには一〇の宝石がはめ込まれてある。この装備品のランクは最高のＳＳＳランク。少年の裏庭に生えていた小さな木で作ったらそれが生命樹だったということで、少年も分からぬうちに手に入れていたものだ。

しかし、少年の実力がこれに頼りっぱなしと言うわけではない。

ミノタウロスたちが壁のように少年に突っ込んでくる。

そのミノタウロスたちに杖は向けず、
少年は自分の前で杖を構えた。

「……君臨者よ。我が魔力を与えよう。契りを交わした友よ、我の前に姿を現せ」

グルンと杖を一回転させる。

そして地面を、トン！　と杖の尻をつかって小突いた。

次の瞬間、ブウンという音を放ち直径五メートルほどの魔法陣と呼ばれるモノが現れた。

「その姿は神の傑作！　来い、獣王（ベヒーモス）！！」

そこから、紫色の、筋骨隆々の五メートル超の体躯。顔は猪のようで、それでいて醜さはどこにもない。

ＳＳランクの魔物。ベヒーモス。そこらへんの中ランクの魔物であれば一度腕を振るだけで挽肉にすることができるような魔物。

手に持つのは幾度も鋭角的に波打つ薄緑色の巨剣。

『……さて、今回は誰を蹴散らせばよいのだ？　ルシア』

「あそこの、ちょっとあなたとキャラが被ってるミノタウロス！！」

『承知した。――我が友の頼み故、許せ、同胞！！』

ダンッ！　と迷宮の床をぶち抜くように踏み込むベヒーモス。一〇メートル以上あった距離を一気に詰め、そして巨剣で切り上げた。

鮮血。ミノタウロスの巨体が両断される。

そこから、暴虐の旋風が吹き荒れた。

「ほんと、神様ってずるいですよね。僕に召喚術以外の才能をくれなかったんですから」

彼の名前は、ルシア＝ラフォード。

ギルドでの通り名は『外れまくった（アウトローサマナー）召喚士』。

攻撃魔術はもちろん、防御魔術も、回復魔術も、補助魔術も使えない。召喚魔術しかつかえないという、天は二物を与えないを体現した少年だった。

ベヒーモスがその巨剣で最後のミノタウロスを切り倒したのが視界に移る。

ベヒーモスは巨剣にこびりついた血糊を軽く払うと、ドシンドシンと地面を揺らしながらルシアのもとに歩いてきた。

「今回もありがとうございます」

『フム。我が友の頼みだ。断るわけにもいかぬのでな』

「フフ、あいがとうございました。では、」

『ん？　ああ、そういえば伝言を預かっていたな。天使（エンジェル）からの伝言である』

「げ、エンジェルからですか？」

一歩身を引くルシア。その顔にはくっきりと汗が滲んでいる。

そんな彼を見てベヒーモスは、『そういやがるでない。アレも友の一人であろう？』と言ってきた。

「……友と言うより、違う目線で見られているような気がするんですよ」

少し遠い目をしながらルシアは、「で？　どんなですか？」と先を促した。

フム、とベヒーモスは一息つくと、

『……ルシア、最近召喚してくれないな。……次、召喚されなかったら、首吊るしかない。……だそうだ』

「だあああああああああああッ！？」

確定した。次はどんな状況であってもエンジェルを召喚しなくてはならない。

ルシアはなんとかベヒーモスに説得を頼もうとしたが時すでに遅し。ポウッ、という淡い光に包まれて姿を消してしまった。

「……鬱です。……帰りましょう」

なるべく、なるべく召喚しないように、魔物から姿を隠しながら少年は帰路へとついた。

大きなため息とともに、この物語は始まる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3898ba/

アウトローサマナー

2012年1月10日02時50分発行